

# 手紙のなかの 一学期



高橋道子 作  
岩淵慶造 絵



子どもの文学

## 手紙のなかの1学期

NDC 913 偕成社 174p. 23cm 1979年

1977年11月 1刷

1979年4月 5刷

|     |         |         |         |        |
|-----|---------|---------|---------|--------|
| 著者  | たか<br>高 | はし<br>橋 | みち<br>道 | こ<br>子 |
| 発行者 | 今       | 村       | 廣       |        |

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京5-1352番

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-626180-0904

Printed in Japan

©高橋道子 岩淵慶造 1977

# 手紙のなかの一学期

高橋道子 作 岩淵慶造 絵





●はじめに

去年、わたしが受けもっていた久保田  
レイくんは、いくら話しかけても、黒目  
がちの目を、スッとそらせてしまう、ち  
よっぴりつきあいにくい男の子でした。

そのレイくんが、転校してからたった  
三か月のあいだに、ぶあつい手紙を十通  
も書きおくってくれたのです。わたしの  
むねにだけしまっておくのは、もったい  
ない気がしましたので、レイくんのおゆ  
るしをえて、みなさんにご紹介すること  
にしました。

広瀬リツ



## 手紙のなかの一学期／もくじ

|        |                                         |    |
|--------|-----------------------------------------|----|
| 先生の手紙① | 三どめの正直 <small>しやうじき</small>             | 8  |
| レイの手紙① | 妹 <small>いもうと</small> のエイ               | 14 |
| 先生の手紙② | 波 <small>なみ</small> の輪 <small>わ</small> | 20 |
| レイの手紙② | おどり場 <small>ば</small>                   | 25 |
| 先生の手紙③ | きいろい長ぐつ                                 | 36 |
| 先生の手紙④ | しゃぼん玉 <small>たま</small>                 | 46 |
| レイの手紙③ | かえったひな                                  | 52 |
| 先生の手紙⑤ | 神 <small>かみ</small> さまのささやき             | 59 |
| レイの手紙④ | 四つのくちばし                                 | 66 |
| 先生の手紙⑥ | パンだね                                    | 76 |



|         |                        |     |
|---------|------------------------|-----|
| レイの手紙 ⑤ | おにっ子どうし                | 82  |
| 先生の手紙 ⑦ | 血すじの話 <sup>はなし</sup>   | 89  |
| レイの手紙 ⑥ | シヨックなこと                | 94  |
| 先生の手紙 ⑧ | いのちのおもさ                | 100 |
| レイの手紙 ⑦ | チュンチュン                 | 106 |
| 先生の手紙 ⑨ | いじわる                   | 115 |
| レイの手紙 ③ | けっさくな家出 <sup>いえで</sup> | 122 |
| レイの手紙 ⑨ | お友だち                   | 138 |
| 先生の手紙 ⑩ | アヤちゃん                  | 145 |
| レイの手紙 ⑩ | ごめんな                   | 153 |
| 先生の手紙 ⑪ | 大空へ                    | 171 |
| あとがき    |                        | 174 |



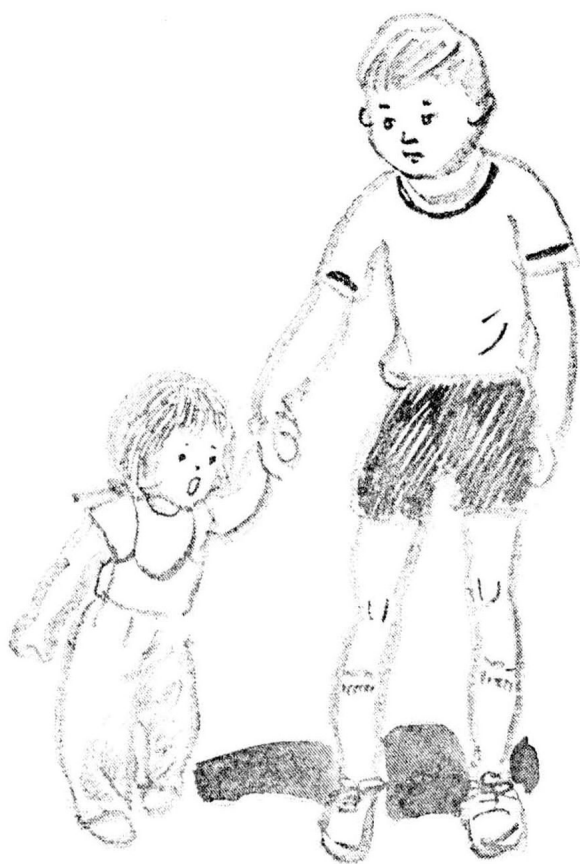
作者・高橋 道子<sup>たかはし みちこ</sup>

広島市に生まれる。早稲田大学文学部仏文科卒。1年間ほど、出版社に勤務。その後も編集関係の仕事に携わる。1児の母。「ごき」同人。この『手紙のなかの一学期』が処女作。  
住所／東京都練馬区石神井台 4—10—46

画家・岩淵 慶造<sup>いわぶち けいぞう</sup>

1942年、青森県に生まれる。亜細亜大学を卒業後、広告の仕事をし、67年ごろからさし絵をはじめ。主な作品は絵本『ちいさなちいさな青いそら』、さしえ『坂の上のグミ屋敷』『生きていくこと』『五年生のスケッチ』など。  
住所／東京都世田谷区上北沢1—18—15—304

高橋道子  
手紙のなかの二期



先生の手紙①

三どめの正直<sup>しやうじき</sup>



レイくん、お元気<sup>げんき</sup>ですか。

三年生の終了<sup>しゆうりようしき</sup>式<sup>しき</sup>の日、教室<sup>きやうしつ</sup>はすっかりあけわたす用意<sup>ようい</sup>ができてしまい、遠足<sup>えんそく</sup>がえりのおべんとうばこのように、からっぽで、ほんのすこし心のこりな感じ<sup>かんじ</sup>でしたね。

教<sup>きやう</sup>だんにひとり立ったレイくんは、ちょっぴりさびしそうにうつむいて、みんなにおわかれのあいさつをしたでしょう。

そのあと、先生と指<sup>ゆび</sup>きりげんまんしたこと、もうわすれてしまったのかしら。

先生が書くのは、これで三どめなのに、先生はまだ、一どもレイくんからのお手紙<sup>てがみ</sup>を受けとってないのです。でも、〈三どめの正直<sup>しやうじき</sup>〉ということもありますから、きょうはびん

せんでアタックしてみることにしました。

レイくん、新しい学校には、もうなれましたか。お友だちもできたかしら。たんにんの先生は、男の先生？ あたったでしょう。

ほんとうのことというと、レイくんからなかなかお返事がこないの、先生、ちょっと気になって、このあいだ、レイくんのおかあさんにお電話してみたのです。

元気で学校にいつているときいて、安心しました。妹のエイちゃんも、おかあさんといっしょに、毎日、養護学校にいつているそうですね。

「ほんとに、日に日に、いきいきしてくるようです。」

と、おかあさん、とてもよろこんでいらっしゃいました。

はじめは、養護学校に入れようか、どうしようかと、ずいぶんまよっていらっしゃいましたが、先生、いっしょうけんめいおすすめして、やっぱりよかったなと思っています。

そのために、養護学校の近くへひっこしたり、転校したりしなければならなくなって、レイくんには、ほんとにお気のどくでしたけれど。

でも、見ていてごらんさない。エイちゃん、いまにきつと、見ちがえるようになると思います。文を書いたり、計算けいさんしたりするのは、もしかしたら、むりかもしれません。でも、生きることで、それだけではないでしょう。

だれにでも、その人にあつた生きかたがあるように、エイちゃんには、エイちゃんにあつた生きかたが、あるんじゃないかと思うのです。

身のまわりのことが、自分でできるようになるって、すばらしいことだし、お友だちと遊あそんだり、話はなしたりできるようになれば、エイちゃんの世界せかいは、うんと大きくひろがるでしょう。エイちゃんにとって、それはとてもしあわせなことだし、エイちゃんのカか家族ぞくにとつても、うれしいことじゃないかしら。

レイくんから見れば、エイちゃんのおゆみは、ゆっくりすぎて、じれったいかもしれません。でも、レイくん。エイちゃんがほんのすこしずつでもかわっていくのを、おにいちゃんらしく、あたたかく見まもってあげてください。そして、ときには、手をとって、たすけてあげてほしいと思います。先生からのおねがいよ。



Reige

わたしはというと、また一年生からやりなおしです。三年生を見なれた目には、一年生はそれはかわいらしいです。まだおかあさんのおちちのにおいがしている、ヒヨッコさんたちですもの。

ぎやくにいえば、三年間<sup>ねんかん</sup>たつうちに、子どもって、こんなにも成長<sup>せいちょう</sup>するものかしらと、いまさらのように、目を見る思いです。せいの高さもちがって、ものさしではかれないのが、さんねんですけれど。

それはそうと、きょうは、小鳥<sup>こどり</sup>はかせのレイくん<sup>レイくん</sup>に、つつしんで報告<sup>ほうこく</sup>しておかなければならないことがあるんです。

去年<sup>きょねん</sup>の家庭訪問<sup>かていほうもん</sup>のとき、レイくんのうちで、ベニスズメを見せてもらったでしょう。そのベニスズメを、町でぐうぜん見かけたので、このあいだの日曜日<sup>にちようび</sup>に、つがいを買<sup>か</sup>ったのです。

いつもなかよくよりそって、とまり木<sup>き</sup>にとまっているすがたは、なんともいえないほど、かわいいですね。ここにきたばかりで、なれていないせいかな、まだあんまり鳴<sup>な</sup>いてはくれ

ません。

それで、レイくんにききたいことがあるんです。かごの中に、すを入れてやらなくても、いいのかしら。

お店の人は、すがあると、小鳥がすの中にばかりはいつてしまうから、入れないほうがいいというんです。でも、すがないと、たまごをうまないんじゃないかしら。

レイくん、この質問には、きつと答えてくださいね。新しい学校のようにすもよ。まっます。ほかの勉強はともかく、作文ナンバーワンのレイくんなら、手紙ぐらい、朝めしまえのはずですもの。

では、おかあさんに、よろしくおつたえください。エイちゃんともなかよく。

さようなら

四月二十日

広瀬リツ

久保田礼くん

レイの手紙Ⅱ

妹のエイ



ひろせ  
広瀬先生へ。

「レイくん、新しい学校にいったら、お手紙<sup>てがみ</sup>ちょうだいね。」

終了<sup>しゅうりようしき</sup>式の日、先生がそういったのは、おぼえてます。だけど、あのとき、先生はすぐごういんだったんだもの。ぼく、つい、指<sup>ゆび</sup>きりしちゃったんです。だから、はくじょうすると、やくそくまもろうなんて、ぜんぜん思っ<sup>おも</sup>てませんでした。

だけど、こんどは、どうしてもへんじ書<sup>か</sup>かなきゃならなくなっちゃった。だって、しつもん<sup>こた</sup>に答<sup>こた</sup>えなくちゃいけないから。

だけど、ベニスズメのこときいたのは、ほんとに、ぼくに手紙、書<sup>か</sup>せるためでしょう。

先生のサクセン、ちゃんとわかつてるんだ。

だって、すがいるかどうかなんて、ちょっと本を読めば、わかることだもん。本がなければ、ためしてみればいいんだ。先生がいつもいったみたいに。

それで、すのことだけど、ベニスズメのばあい、すはなくてもいいと思います。ぼくも、ベニスズメのかごには、すはいれてやってません。

なぜかという、かごでかつてるベニスズメは、たまごをうんでも、そのたまごをだかないんです。ぼくもやってみたけど、だめでした。ジュウシマツにたまごをだかせるやりかたもあるけど、これもあんまりうまくいきません。

せんもん家は、かん木や草をいっぱいうえた、大きな鳥小屋でかつてるそうです。けど、先生はまだ、そこまでコトリのトリコになってないよね。

それから、新しい学校のことだけど、ぼくはまだ、学校にも先生にも、ちっともなれてません。友だちもできません。教室では、口もききません。

転校してきたばかりのときは、みんなめずらしがって、話しかけてきました。だけど、